

# 視覚障がいをもつ乳幼児への早期支援

## ～アイアイ教室での取組～

岐阜県立岐阜盲学校 教諭 森田 裕子

### 1 はじめに

当校は、視覚障がい教育を担う岐阜県内唯一の特別支援学校として、視覚障がい支援部に「見え方の相談支援センター」を位置付け、視覚に障がいがあったり、見え方に心配があったりする乳幼児から大人の方までを対象に相談支援を行なっている。その中で早期支援については、乳幼児を対象とするアイアイ教室の開催や在籍園や療育センター等への訪問支援、当センターが主催する「目に関する相談会」との連携を図ることなどにより、子どもの育ちを保護者と職員が共有し、育ちを支えることを大切に活動している。

ここでは、アイアイ教室の実践について報告する。

### 2 アイアイ教室の概要

アイアイ教室では、視覚に障がいのある0歳から就学前までの乳幼児とその保護者の相談に応じ、育児や学習、生活についての支援を行っている。必要に応じて関係機関と連携をとり、情報交換をしたり問題解決を図ったりしている。当校の幼児教室を会場として毎週水・木曜日の第3・4校時に開催し、リトミックや絵本の読み聞かせ等の集団活動、サーキット運動（粗大運動）や目と手の協応等の個別の課題活動を行なっている。また、視能訓練士と連携して見え方の検査を実施したり、乳幼児の実態に応じて点字のレディネスの内容を実施したりすることもある。

アイアイ教室については、当校ホームページに掲載案内を掲載し、広く参加を呼びかけている。電話での相談や予約も随時受け付けており、電話相談から来校につながることが多い。また、「目に関する相談会」への参加や地域の保健師からの紹介により来校するケースもある。いつでも保護者と一緒に参加することが可能であり、地元の幼稚園・保育園に在籍しながら利用することができる。

近年の来談者数の推移、年齢別内訳等については、以下の表のとおりである。

表1 来談者数の推移 ※来談者数の[ ]内は、新規の来談者数

	H29	H30	R元	R2	R3	R4
来談者数(人)	9 [7]	9 [6]	8 [3]	7 [3]	6 [3]	10 [4]
延べ回数(回)	117	87	73	38	27	40

表2 年齢別参加者数および各乳幼児の延べ参加回数(R4年度)

年齢(歳)	0	1	2	3	4(年少)	5(年中)	6(年長)
人数(人)	1	2	2	2	0	2	1
乳幼児	A	B   C	D   E	F   G	—	H   I	J
回数(回)	1	1   1	1   1	1   27	—	1   1	5

アイアイ教室への来談者は年々減少傾向にある。特に R2年度、R3年度は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、開催が中止となる期間もあり大きく減少した。R4年度は中止の期間がなく、新規の来談者が4名あったものの、定期的に参加する乳幼児が増えることはなかった。定期的な参加が難しい原因としては、居住地が遠方である、保護者の都合により送迎が難しい、他機関も利用しており予定が合わないなどが考えられる。このようなケースに対しては、アイアイ通信を送付したり電話で近況を聞き取ったりするなどして保護者と連絡をとり、いつでも教室に参加できる状況であることを伝えていくようにしている。また、遠方の乳幼児を対象に「サテライトアイアイ教室」と「情報交流会」を開催している。R4年度には高山市でサテライトアイアイ教室を1回と、情報交流会を2回（そのうち1回はオンライン）実施した。サテライトアイアイ教室には、視覚障がい支援部の職員に加え視能訓練士も参加し、乳幼児の見え方について専門的なアドバイスをすることができた。情報交流会には、保健師・保育士・児童発達支援事業所職員・地域の特別支援学校コーディネーター等の様々な関係機関の職員が参加し、それぞれの立場からの情報を共有することができた。

### 3 アイアイ教室での実践について

H30 年度から R3年度までの4年間、外部講師として筑波大学附属視覚特別支援学校乳幼児教室担当の高見節子先生を招き、アイアイ教室での支援の充実を図るため実践を行なった。新型コロナウイルス感染予防のために、オンラインでの実施となる年度もあったが、アイアイ教室の授業参観を通して、教室環境や活動内容、子どもの実態に即した指導について指導助言を得たり、保護者座談会の開催を通して保護者支援の在り方を学んだりした。

以下には、当時の指導助言の内容を踏まえた、その後の実践を紹介する。

#### (1) 教室環境の改善

H30 年度には「幼児期の教育は環境による教育であり、人も環境である」という高見先生の助言を受け、教室環境の改善を図った。まずは、活動の中で使用する玩具・教具の収納場所や収納方法の見直しを行なった。

幼児がアイアイ教室に来室した際、自分で好きな玩具や気になる物に近付き、手に取るができるよう、玩具を置く棚のカーテンを開けておくようにした。幼児は来室すると、自分の好きな玩具を探して手を伸ばしたり、保護者や教師に言葉で伝えたりして意欲的に遊ぶ姿が見られるようになってきた。集団での活動時にはカーテンを閉めて、活動に気持ちが向けられるようにしている。

また、出席カードや活動でよく使用するひも鈴やパラバルーン等を置く場所を整理し、1つの棚に1つのアイテムを置き、棚の位置は幼児の動線を考慮した。出席カードについては、一人一人に個別のかごを用意し、その中に一人分のカードとシールを一緒に入れ、椅子の正面の棚に置くようにした。幼児は棚の位置、高さで置き場所を覚え、自分で準備や片付けができるようになった。



玩具・教具の収納場所

個々の教具についても、収納袋のサイズを大きくしたり、上部が開いた箱に変更したりすることで、幼児が自分で準備や片付けが行えるものにした。また、きんちゃく袋の形を、両手を左右に引っ張って開閉できる2本のひものついた袋に統一した。教師の言葉掛けや手を添えた支援も「ひもについているこぶを持って、引っ張って」などと具体的な言葉にしながら行うことができるようになり、幼児も動作を言葉と一致させて獲得することがスムーズになった。



きんちゃく袋の統一

活動のなかにも、必要な道具を準備することや友達に配ることを意識的に取り入れ、役割を担えるようにした。活動で使用する道具を「自分が準備して、片付ける」という気持ちが育ち、進んで活動しようとする姿が見られるようになった。さらに、役割を任せられた幼児が活動している様子を、別の幼児がじっと見るようになり、その後、じっと見ていた幼児に同じ役割を任せると、嬉しそうに取り組む姿が見られた。

このような取組を行なった結果、少しの言葉掛けや支援で幼児が自分で道具を取りに行ったり、片付けたりできるようになった。また、自分で触って確かめながら探し、探しながら室内を移動する行動が、教室内の空間把握にもつながった。

## (2) 集団活動の見直し

集団活動では、幼児が保護者と一緒に活動に参加することを通して、体を動かすことが楽しいことを知り、言葉と動きを一致させ、もっとやってみたいと思える経験ができることをねらい、活動の内容や流れを整理した。

集団活動の内容を音楽リズム、運動遊び、造形（触る）遊びのカテゴリーで分類し、1回のアイアイ教室の中で季節の歌、体を十分に動かす活動、触る活動ができるよう年間計画を作成した。音楽リズムでは、年間を通して行う音楽・リズム遊びと、月ごとの歌や手遊びを決めた。運動遊びや造形（触る）遊びでは、学期ごとに動きの種類や扱う素材を決め、一定期間、同じ動きに継続的に取り組んだり、一つの素材にじっくり触れたりすることができるようにした。そして、これらの集団活動をアイアイ教室での活動の初めに決まった流れで繰り返し行うことで、子どもが活動の流れを覚え、安心して参加できるようにした。また、参加時の様子や活動に対する反応等を個人ごとの記録に残して情報交換することに合わせて、毎月1回、集団活動についてもその月の活動内容やねらい等を見直し、翌月の活動につなげるようにした。

活動を整理し、活動の流れを作り、繰り返し取り組むようにしたことで、幼児が保護者や教師と一緒に見通しをもって活動することができた。「楽しい」「分かる」「もっとやってみたい」と思える経験が積み重ねられ、活動が始まると笑顔になったり、表情豊かに思いを表現したりする姿が多く見られるようになった。さらに、繰り返しの活動だけではなく他の活動にも興味・関心が広がり、積極的にやってみようとする気持ちや、活動に関する言葉や動きが分かり、保護者と一緒にやるだけではなく、自分でやってみたいという気持ちが育ってきた。

また、活動の中に必要な道具を準備することや友達に配ることを意識的に取り入れ、どの子も役割をもって活動に参加でき



幼児同士の関わる姿

るようにした。役割を担うことで役割を果たしたという達成感を味わい、次への自信へつながることを期待し、支援にあたった。また、役割に興味をもって取り組もうとしたり、実際にやり遂げることができた幼児には、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝え、人との関わり方に気付いたり、自分が役に立つ喜びを感じたりできるようにした。

このように役割を設定したことで、活動の中で幼児同士の関わる場面が生まれ、お互いを意識する姿が見られるようになった。特に、年長児は自分の役割として理解し、「〇〇さん、△△の用意をお願いします」と言葉を掛けると、意欲的に取り組む姿が見られるようになった。それに憧れ、意識して見ていた2歳児も、教師の「次は、〇〇（活動名）しよう」の言葉掛けに、自発的に準備や片付けをする姿が見られるようになった。

### （3）保護者座談会

保護者が家庭で気がかりなことや育児支援について、情報提供及び意見交換を行うことを目的として、高見先生を講師にお招きして保護者座談会を開催した。

H30年度からR3年度まで、毎年一回、定期的で開催し、H30年度、R元年度は当校にて対面で、R2年度、R3年度はオンラインで行なった。各回には、当校のアイアイ教室担当職員が3名程度、保護者が3～5名参加をした。保護者からの質問、相談や、それらに対する高見先生からの回答、見



保護者座談会の様子

えない・見えにくい子の子育てで大事にしたいこと（生活習慣に関すること、言語発達・運動発達に関すること）についての講話を聞いた。また、R2年度、R3年度には、当日の参加が難しい保護者には、事前のアンケートにより質問や相談を集約し、高見先生からの回答を後日、当校職員が伝達する形をとった。

座談会では、保護者が抱える育児や生活の悩み、将来への不安等について、具体的な助言を得ることができた。継続して会に参加している保護者に対しては、乳幼児の前年度からの成長と今後の成長のために今意識して取り組むと良いことなど、その子の実態に即したアドバイスがあった。また、当校職員も座談会を通して、視覚障がい乳幼児の早期教育で大切にすべきこと、保護者支援の在り方等について学ぶことができた。

現在、保護者支援の取組としてアイアイ教室では、活動時間内での日常的な相談、情報交換等に加えて、次のような活動を計画・実施している。1つ目は、「アイアイ学習会」である。保護者の希望を取り、視覚障がい当事者である理療科職員等から、自身の幼少期の体験や学習してきたこと等を話してもらう機会を設定していきたい。また2つ目に、当校に在籍する児童生徒の保護者と交流する機会として、PTA親子活動に参加する「アイアイ交流会」を計画している。こちらはR3年度に実施することができ、1名のみの参加ではあったが、以前アイアイ教室で一緒に過ごした小学部児童と久しぶりに会う機会となり、保護者もとても嬉しそうだった。今後も保護者同士が交流したり、情報交換したりできる場面を設定していきたい。

## 4 子どもの実態に即した個別指導

個別指導では、子どもの実態に応じた見る力、触る力等、生活していく中で必要な力を育てることができるよう、発達検査を通して保護者と子どもの発達段階について共通理解を図った

り、担当者間で情報を共有し個別活動の計画や実践を行なったりすることに取り組んでいる。ここでは、R2年度に実施したA児についての事例と、R3年度に実施したB児についての事例の2例を紹介する。

(1) 対象幼児Aの事例

ア 実態

来校歴 H30年9月～ 岐阜盲学校アイアイ教室（定期的に木曜日来校）

年齢 3歳1か月（R2年12月当時）女児

眼疾患 アクセンフェルト・リーガー症候群、ペーターズ異常、無虹彩症、緑内障、弱視  
視力 測定不能

検査結果 広D-K式視覚障がい児用発達診断検査（検査時1歳11か月）

<p>I 運動発達</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全身運動 57点（1歳11か月程度）</li> <li>・手指運動 30点（1歳4か月程度）</li> <li>・移動 25点（2歳0か月程度）</li> </ul> <p>II 知的発達</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表現 31点（1歳6か月程度）</li> <li>・理解 32点（2歳2か月程度）</li> </ul>	<p>III 社会的発達</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動 27点（1歳7か月程度）</li> <li>・食事 22点（1歳4か月程度）</li> <li>・衣服 12点（1歳10か月程度）</li> <li>・衛生 7点（1歳7か月程度）</li> <li>・排泄 1点（1歳1か月程度）</li> </ul>
---	--

運動発達、知的発達については、社会的発達に比べて高いものの、下位検査の結果にはばらつきがあった。特に、運動発達については「手指運動」が、知的発達については「表現」に課題が多く見られた。

アイアイ教室の活動においては、動作を模倣し動きを表す言葉の意味を理解することや、じっくり見ること、2つのものを見比べること等を活動のなかに取り入れることにした。

これらのことから、A児の目標を「アイアイ教室の場所や人に慣れて、母親から離れても活動できるようになる」「興味のある物に近付いて見たり触ったりし、操作して遊ぶ」「教師の指示を聞いて、動作をしたり、活動したりする」と設定し、支援を行なった。

イ 取組

(ア) いろいろな体の動かし方をすること ～リトミック～

アイアイ教室では、毎回リトミックを行っている。リトミックに使う音楽の速度や旋律の流れや歌詞は、動きのイメージをもちやすくし、楽しく能動的に取り組める手立てとなる。音楽に合わせて取り組むことで、身体を動かすこと、よく見ること、人と関わること等について、楽しみながら身に付けていくことをねらいとしている。

A児は、前年度にリトミックを通して「歩く」「止まる」の動きができるようになった。今年度は、「ゆっくり歩く」「速く歩く」「走る」が音楽に合わせてできるようになること、「ジャンプ」「四つ這い」「後ろ歩き」「横歩き」の動きができるようになることをねらった。

年度当初、リトミックが始まると、A児は「だっこ」と言い、母親に抱っこされることで安心して、歩く、止まる等の活動に参加できていた。家庭では、自分で走ることが楽しくなった時期であったので、走る活動になると、保護者の抱っこから滑り下りて、自分で活動する姿が徐々に増えていった。さらに、毎回の流れを同じにすることで見通しをもち、

活動を楽しむことができるようになってくると、音楽をよく聞き、母親の存在を確認しながらも自分で「ジャンプ」「四つ這い」「後ろ歩き」ができるようになった。

「横歩き」では、最初は保護者と両手をつなぎながら一緒に歩いていたが、物干し竿を両手でつかみ、バランスをとって、平面の一本橋を足裏で感じながら横歩きすることに取り組んだ。足の動かし方については、教師が目の前でゆっくりと手本を見せたり、動かす足を触って伝えたりすることで覚え、自分で横歩きをすることができるようになった。

#### (イ) じっくり見ること ～音楽リズム、造形遊び～

教師や保護者の動きを間近で見て、真似できることをねらって、わらべうたを中心に母親と手遊び、触れ合いあそびに取り組んだ。例えば、『ちょちちょちあわわ』は、「手を口に持っていく」「片手はパー、もう片手は人差し指にする」「頭や肘などを手でトントンたたく」等の動きがある。後日、アイアイ教室で行った手遊びを家庭で思い出し、自分で歌いながら手遊びをする姿があったと聞き、とても嬉しく感じている。



手遊びの様子

また、造形遊びの活動では、「持ちやすい形のクレヨンで自由に描く」「枠の中をクレヨンで塗る」「枠と同じ色のシールを貼る」「印のところにシールを貼る」「支柱と同じ色のリングを通す」「○△□の型はめをする」等に取り組んだ。保有する視力で色をじっくりと確認し、色名を言ったり、地とシールの色の違いを何度も見比べたりすることができるようになった。

こうした取組を継続する中で、年度の終わり頃には、見分けたり、見比べたりする活動に興味・関心が出てきた。課題をじっくり見て取り組み、やり終えると、「できた！」を笑顔で表現し、さらに「つぎは?」「もっと(やる)」という言葉も聞かれるようになった。

#### ウ 取組の成果

個々の実態に応じた見る力、触る力等、生活していく中で必要な力を育てることができるような取組を検討し、実践した。そのために、保護者との情報交流を大切にし、発達段階とその時の子どもの興味・関心を考慮し、個別の課題を設定してきた。

保護者とは、毎回、A児がその時に興味をもっていること、できるようになってきたこと、家庭での遊びの様子等について情報交流を行った。家庭で興味をもっていることをアイアイ教室の活動に取り入れたり、アイアイ教室で取り組んだ手遊び、シール貼り、お絵かき、型はめ等を、家庭でも積極的に取り入れてもらったりした。家庭で大きなぬいぐるみを大好きになったことで、アイアイ教室でも大きなぬいぐるみと一緒にあれば、教師とバランスボールに乗ることや毛布ブランコ等の少し苦手な活動でも挑戦してみようとする姿があった。また、それまで少し関心があった赤ちゃん人形のお世話遊びをアイアイ教室で行うと、より興味をもち、「一緒にお風呂(ボールプールに入る)しようか」「あかちゃん、ねんね」等、話し掛けながら世話をする姿が見られるよう



お世話遊びの様子

になった。A児は、3歳の誕生日に赤ちゃん人形をプレゼントされ、アイアイ教室にも嬉しそうに持って来て、見せてくれるという出来事があった。

今後も保護者からその時の幼児の興味・関心やできること等の情報をもらい、課題を設定することを継続していく。さらに、保護者に取組の意図を伝えるとともに、職員間で共有することを大切にしていきたい。

また、視覚発達の観点からも支援方法や活動内容をより一層充実したものにしていきたいと考え、高見先生からの、弱視児の見え方（上下左右どの辺りが見やすいのかなど）を改めて確認する活動を取り入れること、姿勢よく、ものを見ることができるよう書見台を使用することなどのアドバイスを個別活動に取り入れた。

A児の見え方や認知発達については、実際の活動の中でも改めて知ることができる場面があった。実物のみかんと柿を見比べた際に、どちらも「みかん」と答えることがあった。手で触り、硬さや表皮の違い、へたの違い等の観点を用意することで、改めて見比べ、違いを感じることができた。実物をよく触ることを通してそれに関する言葉を知り、使えるようにしていくことが大切であることも大切である。実物に触れたり、体験したりすることを通して、ものや事柄と言葉を一致させる認知の力を付け、「できた！」「もっとやりたい！」という経験を積み重ねていきたい。

## (2) 対象幼児Bの事例

### ア 実態

来校歴 R2年3月～ 岐阜盲学校アイアイ教室（定期的に水曜日来校）

年 齢 2歳8か月（R3年12月現在）男児

眼疾患 不同視弱視、遠視（右：+0.75 左：+4.00）

視 力 視力検査ができないため、不明

9月より、毎日1～2時間、眼鏡（右側）に布アイパッチをつけて活動するように眼科より指示あり。

検査結果 広D-K式視覚障がい児用発達診断検査（検査時2歳5か月）

I 運動発達	III 社会的発達
・全身運動 55点（1歳9か月程度）	・活動 30点（1歳10か月程度）
・手指運動 35点（1歳9か月程度）	・食事 27点（1歳8か月程度）
・移動 23点（1歳6か月程度）	・衣服 5点（1歳5か月程度）
II 知的発達	・衛生 5点（1歳6か月程度）
・表現 59点（2歳3か月程度）	・排泄 4点（1歳5か月程度）
・理解 24点（2歳0か月程度）	

知的発達はほぼ年齢相応であるのに対し、社会的発達および運動発達は実年齢より低い結果となった。

社会的発達については経験値の差によるものとみられたため、保護者に家庭での様子を聞くと、「今までやらせてみようとしていませんでした。この年齢でできるものなのですね。家でやってみようと思います」という答えであった。

アイアイ教室では、運動発達について検査の項目に注目し、B児の課題に対してどのようにアプローチするかを考えた。個別の活動に、登る、降りる、歩く、跳ぶ、這うなどの様々

な動作を組み合わせた「サーキット運動」、目と手の協応動作として「シール貼り」「コイン入れ」などを活動内容に取り入れることとした。

B児の活動目標を「教師と一緒に、体全体を使った活動を楽しんだり、目と手を使って遊んだりすることができる」「布アイパッチをした状態で、いろいろなものをじっくり見て、形や大きさ、遠近感などを正しく認識することができる」とし、実践を行った。

## イ 取組

### (ア) 体を大きく動かすこと ～サーキット運動～

サーキット運動では、積極的に活動に参加できるように、B児が大好きな滑り台をスタートに、一本橋渡り、トンネルくぐり、大型リバーシー渡り、マット（ジャンプ）のコーナーを設定した。各コーナーに教員がつき、危険なときにはいつでも手が届くようにすることで、B児が安心して活動に取り組める環境作りをした。活動後には、教員間でその日の様子を振り返ってコーナーの内容を見直したり、手本の見せ方や言葉掛けの仕方を考えたりして、実態に合わせた運動遊びを設定するように心がけた。

毎週同じ活動を繰り返すことで、B児本人が見通しをもち、自分から進んで活動に参加してくれるようになった。サーキット運動を通して、安心して楽しく体を動かし、様々な体の動きの経験を積み重ねることができた。

活動に慣れてきた頃、コースの途中に、それまで怖くて乗ることができなかったトランポリンのコーナーを少しずつ取り入れた。それまではトランポリンに乗ることを嫌がって避けていたが、トランポリンの上をハイハイでゆっくり進む、手をつないで歩く、ゆっくり一人で歩くというようにスモールステップで繰り返すことで、一人でジャンプすることができるまでになった。様々な体の動きの経験を通して、「できた」経験が積み重なり、B児の自信へとつながっていった。



トランポリンの様子

### (イ) 手指操作に関すること ～どんぐりマラカス作り～

制作活動では、スタンプを使って花火や季節の木を表した作品を作ったり、指先を使ってちぎったキラキラの折り紙をクリスマスツリーやコマの飾りつけに使ったりするなど、季節の作品やコマ回しを楽しむ活動などを行なった。いずれも「季節の自然物に触れること」や「手指を使うこと」を大切に活動内容の設定をした。

「どんぐりマラカス」の活動でも、制作に関連して、枝についた状態のどんぐりを観察したり、学校周辺の散策を通してどんぐりを拾ったりするなど、実物を触ってにおいを嗅いだり、じっくり見て観察したりする活動と合わせて行なった。

拾ってきたどんぐりを小さなペットボトル容器に入れる活動では、小さなどんぐりの実を指先でしっかりつまみ、容器の口のところまで持っていき、落ちないようにそっと入れる活動を丁寧に行なった。初めは、教師が容器が倒れないように押さえて、そこにB児がどんぐりを入れていたが、何度か繰り返



マラカス作りの様子



すうちに、B児が左手で容器を押さえ、右手でどんぐりを入れるようになった。こうすることで、容器の場所を自分で把握しやすく、スムーズにどんぐりを入れることができることにB児が自然と気付いたようだった。また、大きくて入らないどんぐりがあることにも気付き、いろいろな角度にしてみたり、違うどんぐりに変えてみたりと試行錯誤する姿が見られた。

最後に、容器に好きなシールを貼って飾りつけをし、完成したマラカスを使って童謡の「どんぐりころころ」の歌に合わせて演奏する活動を行った。自分で作ったマラカスを音楽に合わせて振ることがとても楽しく、何度も繰り返し音楽を流して演奏していた。2つマラカスを作って持ち帰ったところ、後日保護者から「家に帰ってからお父さんにマラカスを作ったことを話していました。1つをお父さんに渡して、一緒に振りながらどんぐりころころを歌っていました」という話を聞くことができた。アイアイ教室での経験が家族の会話の中で出てくることをとても嬉しく感じた。

#### ウ 取組の成果

これらの活動を通して、以下のような4つの成果を感じることができた。

1つ目に、広 D-K 式視覚障害児用発達診断検査を実施し、その結果を教師と保護者間で共有して課題を見つけ、家庭やアイアイ教室で取り組めることを考えて、個別の活動に生かすことができた。活動の目的を保護者と共有することで、B児の成長と一緒に喜び、次の活動へとつなげることができた。

2つ目に、発達段階に応じた活動を繰り返し行うことで見通しをもち、B児が進んで活動に参加することができた。その結果、できることが増え、本人の自信につなげることができた。自信をもつことで、それまで苦手だったことや、初めてののことに對しても前向きに取り組めるようになった。

3つ目に、じっくり見る経験ができる環境作りをすることができた。乳幼児期は多くの時間を家庭で過ごすことになるが、子育てをする中で物をじっくり見たり触ったりすることを意識する余裕がない家庭もあるかもしれない。そうした時に、アイアイ教室で物をじっくり見て触る時間を確保することは、保護者にとっても有意義な時間になると考える。家庭ではなかなかできないこと、または家庭でも少しでも取り入れられる活動内容を考え、保護者と一緒に活動することを通して、活動の仕方や環境作り、言葉掛けの仕方等を提示することができた。

4つ目に、気に入った曲を家でも歌うなど、家庭での保護者とB児のふれあいの幅を広げることができた。アイアイ教室で作った楽器を使って家庭で歌を歌ったり、集団活動で行うマッサージを家庭で実施したりと、保護者が家庭でアイアイ教室の活動を繰り返すことで、B児にとってアイアイ教室がより身近に感じられる場所となることにもつながった。

## 5 まとめ

アイアイ教室の実践に対して外部講師からの専門的かつ客観的な指導により、教室環境の整備や活動設定の工夫、乳幼児の指導方法や保護者支援の在り方について学ぶことができた。また、発達検査の実施を通して、保護者と対象乳幼児の発達段階を共有して次の課題を考えたり、担当職員で活動内容を検討し実施したりすることができた。これからも、個々に応じた見る力、触る力を育てることができるような取組を継続していきたい。

今後は、アイアイ教室に通うことが難しい乳幼児や保護者に対する支援の拡充を目指していきたい。当校から離れた地域に暮らす乳幼児に対しては、担当者が出向いてサテライト教室やその地域での支援会議を開く取組を始めている。また、障がいの状態が多様化・重度化する中で、他機関に通いながらアイアイ教室を利用する乳幼児も多い。他機関や地域の特別支援学校との連携を図ることで、視覚障がいの視点からのアプローチだけでなく、様々な視点から早期支援を充実させ、本人、保護者に寄り添った支援を行っていきたい。